



加須市長 高橋 稔裕氏

市長のメッセージ

加須市は、東京都心からおおむね50km圏内に位置し、都心に近く暮らしやすい環境にありながら、都市機能が集積する市街地と農村地域が調和する田園都市です。

東北自動車道加須インターチェンジを有し、圏央道沿線にも位置するなど、広域交通アクセスにも恵まれています。また、県内一の生産量を誇る米をはじめ、梨、いちじく、いちごなどの豊富な農産物があるほか、歴史ある祭事など、各地域に多くの貴重な財産があります。

こうした地域特性等を最大限に活かしながら、企業誘致の推進、子育て支援の充実などに取り組み、市民の皆様が「加須市は住み良いまちだから帰ってきなよ」と自信をもって言えるまちを目指してまいります。

はじめに

埼玉県北東部、関東平野の中央を流れる利根川の中流域にある加須市は、市域の約半分が農地で、その85%を水田が占める県内有数の米どころだ。一方、製造業を中心に企業立地が進み、近年は社会増が続くなど、産業都市としての注目度も高まっている。

こうした変化の背景には、企業誘致だけでなく、子育て支援や教育にも力を入れてきた積み重ねがある。加須市では今、「産業」「暮らし」「教育」が結び付きながら、次の世代へつなげる持続可能なまちづくりを進めている。

企業に選ばれる、「立地」の強み

企業が加須市に目を向ける理由の一つが、広域交通網に恵まれた立地の良さだ。東北自動車道の加須ICを有するほか、圏央道の白岡菖蒲ICにも近く、関東各地へアクセスしやすい。平坦な土地で、自然災害が比較的少ない点も大きな魅力だ。一定規模以上の工場を指す「特定工場」の立地件数が埼玉県内1位であることから、産業用地として選ばれてきた実績がうかがえる。

市内には現在、11の産業団地があり、250社を超える企業が立地している。区画はいずれも埋まっており、新たに進出したいという企業の声も少なくない。近年は交通アクセスの良さを背景に、物流関連企業からの相談も多いという。企業からの高いニーズに応え、市では今後、新たな産業団地の整備も検討してお

り、農地や周辺環境との調和を図りつつ、さらなる企業誘致を進めていく考えだ。

子育て世帯に寄り添う、切れ目のない支援体制

働く場が増える一方で、そこで暮らす家族をどう支えるかも重要になる。加須市は、子どもの成長段階に応じた支援が行き届くよう、相談や健診、保育の体制を整えてきた。

加須市では、所管が異なる幼稚園と保育所の垣根を越え、一体的な子育て支援を推進する「こども局」をいち早く設置した。2024年には母子保健と児童福祉を統合した「こども家庭センター（すくすく子育て相談室）」を設置し、妊娠期から子育て期まで相談しやすい体制を構築している。乳幼児健診は法定の2回に加え、独自に5回を実施し、計7回の健診を行っている。埼玉県内の市では加須市だけの取り組みだという。受診率は約95%以上で、未受診者には保健師が訪問や電話で発達や育児の状況などを丁寧に聞き取



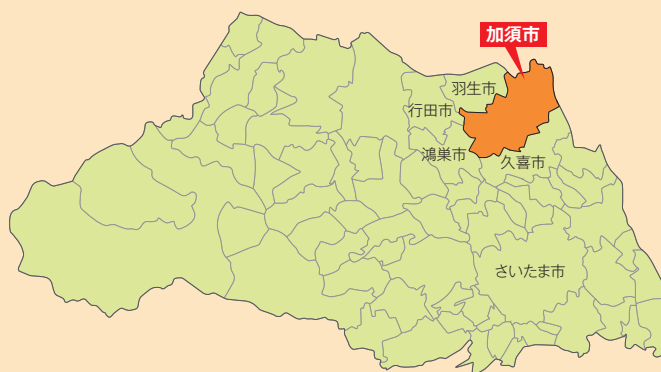
ワールドカップにちなんだ料理や地元産の食材を使った献立など、工夫を凝らした給食に子どもたちの笑顔がこぼれる

加須市概要

市の木:サクラ 市の花:コスモス

人口(2026年9月1日現在)	111,551人
世帯数(2026年9月1日現在)	52,410世帯
平均年齢(2026年1月1日現在)	49.6歳
面積	133.30km ²
製造業事業所数	284所
製造品出荷額等	5,353.6億円
卸・小売業事業所数	700所
商品販売額等	1,900.9億円
農業産出額	127.1億円
一人当たり都市公園面積	15.20m ²

資料:経済産業省「経済構造実態調査」ほか



主な交通機関

- 東武伊勢崎線 加須駅、花崎駅
- 東武日光線 新古河駅、柳生駅
- 東北自動車道 加須ICから市役所まで約3km

り、子育て家庭を孤立させない仕組みを整えている。

2026年度からは市内全小中学校の給食費を完全無償化し、アレルギーなどで給食を食べられない児童生徒には市内店舗で使える金券を配布するなど、実情に応じたきめ細かな支援を広げている。

市は「日本一子育てしやすい田園都市」を目指し、今年度からは子どもたちの声を施策に活かす取り組みも始めた。グループワークなどを通じて意見を聴き、「こどもまんなか」のまちづくりにつなげていく。

🌟「宇宙米」が広げる、多様な可能性

加須市ならではの取り組みとして注目されるのが「宇宙米プロジェクト」だ。米どころという地域の特色と、宇宙をテーマにした「加須未来館」を活かし、JAXAきぼう有償利用制度を活用して国際宇宙ステーション (ISS) / 「きぼう」日本実験棟へ加須産米の種もみを送り、地上へ持ち帰って育てるといったもの。民間の宇宙関連企業との連携で実現した。



宇宙米プロジェクトの拠点「加須未来館」。館内にはプラネタリウムのほか、貴重な宇宙服の展示もある

このプロジェクトは、宇宙へ種もみを送り、育てるだけでは終わらない。2025年度から「宇宙×食農×STEAM教育」として、小中学校でロケット工作や宇宙飛行士体験など、探究型学習も始まった。今後は市独自の教育カリキュラムづくりも進める予定だ。

理科や算数にとどまらず、ものづくり、食育、農業、地域学習にもつながるこの取り組みは、宇宙や科学への関心を高めるだけでなく、教科の枠を超えた学びの入り口になっている。身近な米が未知の宇宙とつながる体験をきっかけに、子どもたちは学ぶ楽しさや探究する面白さに触れている。

今後は宇宙米を活用した農業体験講座なども予定されており、教育だけでなく、グリーン・ツーリズムを通じた地域活性化への広がりも期待されている。

🌟産業・暮らし・教育がつながる持続可能なまちへ

加須市では企業誘致と子育て世帯に寄り添う暮らしの支援、それぞれの取り組みを積み重ねてきた。人口が2016年から10年連続で社会増となっているのは、その成果といえるだろう。そこに今、地域の強みを活かした教育の取り組みが加わり、地域活性化にもつながる新たな広がりを見せている。

2025年10月に宇宙へ送った種もみは、今年6月に無事地球へ帰還し、来年5月に田植えの予定だ。地上に戻った種もみは芽吹き、やがて実り、次へとつながっていく。加須市の取り組みもまた、次の世代へと受け継がれ、豊かな実りを育むだろう。(金子佐紀)